

山東竜山文化の編年と類型

——土器を中心として——

李 権 生

【要約】 これまでの山東竜山文化の研究においては、時間及び空間的変化はまだ正確にはあきらかにされてない。特に、一つの遺跡での前後関係を山東竜山文化全体の編年とした欠点が著しい。本稿は、山東竜山文化編年と類型の問題を説明することを目的とし、山東竜山文化の分布地域を五つの地区に分けて、各地区の代表的な遺跡から出土した土器群を層位学的、型式学的に分析する作業を通じて、山東竜山文化の編年を全体的に検討することを試みた。その結果として、高柄杯、鬲、甗、鼎等の代表的な土器を基準として、山東竜山文化が五つの時期に分けられた。さらにこの新しい編年案に基づいて、同時期における土器群の特徴をつかみ、山東竜山文化を十七の異なる類型に区分することができた。これによって、山東竜山文化の展開の不均衡性や空間的変化の流動性の特徴をはつきり示すことができた。この山東竜山文化の時間と空間的変化は黄河の氾濫による可能性があると推測したい。これらの基本的な課題の解明にともない、前出する大汶口文化および後出する岳石文化あるいは、中原地域に分布する二里头文化との関係についての大きな示唆が得られた。

史林 七五巻六号 一九九二年十一月

一 はじめに

山東竜山文化は中国の重要な先史文化の一つである。明治二八（一八九五）年鳥居龍藏氏は、遼東半島の各地を踏査し、一九〇九年には老鉄山石塚を二十余日を費して発掘している。これによって得た土器はおそらくはじめて発見された山東竜山文化のものであろう。^① 一九二八年、竜山文化は呉金鼎氏の城子崖の調査によって山東省ではじめて発見され、竜山文

化と名づけられた。^②そして、梅原末治氏は、これらの調査成果を中国先史文化の源泉の一つに位置づけた。^③一九四一年春、澄田正一氏は三宅俊成氏によって報告されていた大長山島の上馬石遺跡を発掘し、引き続きその年の秋には旅順の老鉄山、四平山石塚を発掘した。^④特に、四平山石塚の発掘において出土した土器は、山東竜山文化をほとんどそのまま具現する観があつて注目された。

戦後、一九五四年に梁思永氏は当時の資料に基づいて山東竜山文化を「山東沿海区」と呼んだ。^⑤この「山東沿海区」というのは山東竜山文化をほかの地区における同種の（広義の）竜山文化から分けて区分する最初の構想であつた。一九五五年、尹達氏の『中国新石器時代』という本が発表されたことや、^⑥兩城鎮遺跡が再度調査されたことによつて「山東沿海区」の文化様相が一層明らかになつた。^⑦それに基づいて、安志敏氏は「典型竜山文化」という概念を用いて、黄河中流域に分布している鬲、甗、磨り鉢を代表とする河南竜山文化と区別し、山東竜山文化を表すことにした一方、竜山文化は仰韶文化に起源するものであると考へた。^⑧一九六〇年に澄田正一氏も竜山文化の層位關係を検討し、当地の仰韶文化との関わりが深いと指摘しながら、竜山文化の地域性を総合的に検討した。^⑨

七〇年代に入ると、山東では大規模な遺跡発掘調査が始まつた。特に、大汶口文化の発見によつて、山東竜山文化はこの文化から発展してきたものであることが明らかになつた。^⑩そして、竜山文化の資料が増加し、竜山文化の地域差と時間差が注意されるようになったのが当時の研究の特徴である。まず、張光直 (Chang, Kwang-Chih) 氏は各地域における竜山文化の差異に着目し、山東竜山文化の土器がさらに細分される可能性があると指摘した。^⑪呉秉楠氏らが姚官莊遺跡と青堯堆遺跡を代表とする土器の様相を比較して、両者の間には多くの差異があると考え、^⑫そして、黎家芳、高広仁氏らは当時の資料をまとめて、山東竜山文化の土器をはじめて早、中、晩の三期に編年し、岳石文化の土器を山東竜山文化から取り出すべきであると主張した。^⑬

八〇年代は山東竜山文化の研究が新しい段階を迎えたといえる。まず、八一年には、嚴文明氏は中国全土から発見され

た竜山文化の一般的な特徴を整理し、黒色土器、原始銅器の出現を基準として、竜山文化を「竜山時代」、あるいは「銅石併用時代」と呼び、山東竜山文化の分布範囲を黄河の下流域の南、大運河の東に位置する山東地方に限るとした。¹⁴⁾張光直氏は、¹⁴⁾Cの年代値に基づいて、山東竜山文化が二五〇〇～二〇〇〇年間に限られるとし、当時の集落、住居、墓地の構成や計画を検討した。¹⁵⁾秋山進午氏は、黎家芳氏らの三期説を批判し、山東竜山文化の編年はかならずしも十分ではなく、細分をし直す必要があると指摘した。¹⁶⁾小川静夫、宮本一夫氏らは、山東竜山文化や遼東半島の竜山文化を検討する上で、遼東半島の双砬子遺跡から出土した土器を岳石文化に位置づけた。¹⁷⁾次に、呉御作氏は東海裕、呈子、三里河、大範莊などの遺跡から出土した資料に基づき、兩城鎮の地域性に着目しつつ四期に分け、この類型の分布範囲が泰山の東側に設定されるとした。¹⁸⁾最近では韓燦氏が尹家城、尚莊、西呉寺などの遺跡の資料に依拠して、城子崖出土資料を地域的な類型として把握し、早、晚各二期、四段階に分け、分布範囲を泰山の西側に想定する考えを示した。¹⁹⁾

このように山東竜山文化を東西二つの類型に区分し、さらに編年したことは確かに大きな進歩であるが、山東竜山文化の各地域の遺跡から出土した土器の細分や層序の対応関係を詳しく追究し、編年と類型の研究を行なうことは充分できていないように思われる。

これまで述べてきた研究史からみれば、山東竜山文化はそれに先行する大汶口文化および後出する岳石文化との関係については明らかにしたが、山東竜山文化自身の時間と空間の変化はまだ正確にあきらかにされていない欠点が著しいのである。秋山進午氏によって指摘されているように、²⁰⁾一つの遺跡の前後関係は、あくまでもこの遺跡においてのそれを示すものであって、山東竜山文化全体の編年とは別である。

山東竜山文化の発見から六四年が経過した。上述の現状の上に本稿が展開する議論は以下の三つの基本的な問題の解決を図ったものである。

まず、はじめに各地域の遺跡の層序関係の再検討を通じ、山東竜山文化の主な遺跡から出土した土器群を細分し、高柄

杯、鬚、甌、鼎等の代表的な土器を基準として、山東龍山文化の土器編年を全体的に検討する。

次に、新しい編年案に基づいて、同時期における類型の特徴やその分布範囲の変遷をつかむ。すなわち、龍山文化の類型の分析である。類型とは、文化の低位の概念であり、地域性と時間性がある程度反映するものである。そこで、研究の手段として、土器の相違や変化を指標としながら、山東龍山文化の類型を区分したい。²²⁾

そして、最後に山東龍山文化の形成と終末の問題である。これは難題ではあるが、山東龍山文化の発生から消滅にかけての文化の変動の背景を検討することによって、少なからぬ示唆が得られるものと思われる。

① 鳥居龍蔵『南満州調査報告』一九一〇年(『鳥居龍蔵全集』二〇、一九七六年再収)

② 吳金鼎「平陵訪古記」『中央研究院歷史語言研究所集刊』一一四、一九三〇年

③ 梅原末治『東亞考古学論考』一九三四年

④ 三宅俊成「長山列島先史時代の小調査」『満州学報』四、一九四二年

⑤ 澄田正一「遼東半島の先史遺跡」『樞原考古学研究所論集』四、一九七九年

⑥ 梁思永「龍山文化——中国文明的史前期之一」『考古学報』七、一九五四年

⑦ 尹達「中国新石器時代」一九五九年

⑧ 山東省文物管理处「日照県兩城鎮等7個遺址の初步勘査」『文物參考資料』一九五五年第十二期

⑨ 安志敏「試論黄河流域新石器時代文化」『考古』一九五九年第十期

⑩ 澄田正一「龍山文化のひろがり」『世界考古学大系』第五卷、一九六〇年

⑪ 山東博物館「談談大汶口文化」『文物集刊』一、一九八〇年

⑫ Chang, Kwang-chih: *The Archaeology of Ancient China*, 1977

⑬ 吳秉福ほか「対姚官莊与青堦堆兩類遺存的分析」『考古』一九七八年第六期

⑭ 黎家芳ほか「典型龍山文化的来源、發展及社会性質初探」『文物』一九七九年第十一期

⑮ 敵文明「龍山文化与龍山時代」『文物』一九八一年第六期

⑯ 前掲注⑫に同じ(1960)。

⑰ 秋山進午「龍山文化の土器」『世界陶磁大全』第一〇巻、一九八二年

⑱ 小川静夫「極東先史土器の一考察」『東京大学考古学研究室研究紀要』一、一九八二年。宮本一夫「中国東北地方における先史土器の編年と地域性」『史林』第六八巻第二号、一九八五年

⑲ 吳汝祥ほか「兩城類型分期問題初探」『考古学報』一九八四年第一期

⑳ 韓榕「試論城子崖類型」『考古学報』一九八九年第二期

㉑ 前掲注⑰に同じ。

㉒ 山東龍山文化は泰山周辺に分布しているという特徴をもつために、境界を接しない比較的離れた二つの地域から出土した土器群を比較することにより、両者の間に位置する文化類型の存在とその範囲を解明する方法を採る。たとえば、隣接地区の土器群を直接比較することを避け、魯中南と魯東北或いは魯東南と魯西北を比べて、形が類似する

土器を出土した遺跡どうしをつなぐと、文化類型の特徴と境界線が見

えてくる。

二 各地域の山東竜山文化の段階区分の再検討

山東地区は三方を海に囲まれ、一方が内陸と隣接するが、その隣接地域も、黄河の氾濫と河道の改変により、内陸とながってはまた切り離されるといった状況であったために、相対的に独立した一つの地理単位となる。さらに、この山東地区は、泰山周辺の魯東南、魯東北、魯西北、魯中南と山東半島（廟島群島と遼島半島の最南部を含む。先史時代の半島部分と泰山の東部の間が沼地となったことがあるので、山東半島も独立の小地理単位となった）の五つの小さい地理単位に区分することができる。山東竜山文化はこのような地域に発生、展開したものである。

山東地域では、発見されている山東竜山文化の遺跡は非常に多く、少なくとも一六三箇所以上あるが、発掘を行った遺跡は六〇例しかない（図1）。層位関係がはっきりした分析対象とし得る代表的な遺跡はわずか一七箇所に過ぎない。すなわち、魯東南の呈子^①、東海裕^②、兩城鎮^③、三里河^④、魯東北の獅子行^⑤、魯家口^⑥、姚官莊^⑦、南陳莊^⑧、荊寨王^⑨、青堽堆^⑩、魯中南の尹家城^⑪、西呉寺^⑫、山東半島の楊家園^⑬、大口^⑭、遼島半島の四平山^⑮、老鉄山などである。多くの遺跡が七〇年代以前に発掘されており、当時の認識には誤っていたところが少なくなかったため、各遺跡の時期は正しく位置づけられていないままにある。したがって、まず、上述の代表的遺跡の再整理を行なうことが不可欠である。

1 魯東南地区

魯東南地区の代表的な遺跡は呈子遺跡である。呈子の山東竜山文化の遺構は墓葬と灰坑が多い。報告者が墓坑M32↓M30（Mは墓の番号、Hは土坑の番号、Fは住居址の番号。以下同じ）の切り合い関係に基づいて、山東竜山文化の土器を早、中、晩三期に分けているが、実際には、さらに細分する必要があると思われる。

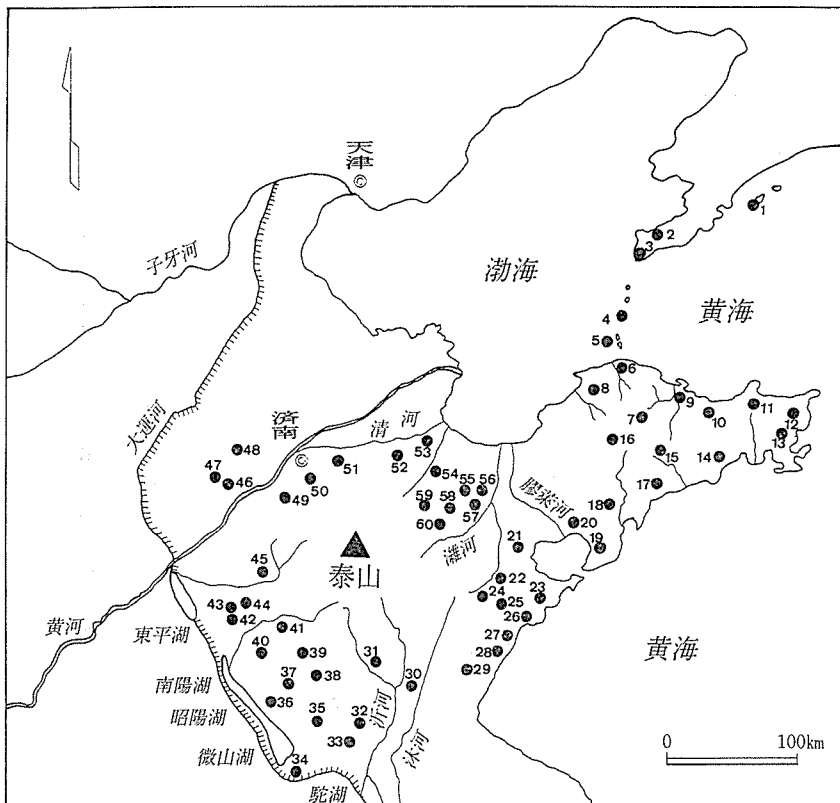


図1 山東龍山文化の主な遺跡の分布

- 遼東半島南部と山東半島地区：1 小珠山，2 四平山，3 老鉄山，4 大口，5 北莊，6 紫荆山，7 楊家園，8 婦家，9 午後，10 東泊子，11 仁柳莊，12 丁家店，13 西賢都，14 陳家村，15 辛安，16 唐山，17 城子頂，18 石院，19 三官廟，20 姜家泊。
- 魯東南地区：21 三里河，22 呈子，23 西寺，24 門土，25 大桃園，26 兩城鎮，27 堯王城，28 東海裕，29 化家城。
- 魯中南地区：30 大範莊，31 西西蔣，32 骨突子，33 沃格，34 高皇廟，35 梁王城，36 龍岡堆，37 東曹東村，38 羊莊村，39 西薛河，40 野店，41 店北頭，42 西吳寺，43 尹家城，44 東魏莊，45 大汶口。
- 魯西北地区：46 南陳莊，47 尚莊，48 荆寨王，49 大辛莊，50 城子崖，51 丁公。
- 魯東北地区：52 鐘家，53 王村，54 寨村，55 姚官莊，56 魯家口，57 獅子行，58 鄒家莊，59 火山埠，60 秦家墩子。

M40から出土した土器は上部が短くくびれる脚をもつ高柄杯、長い頸部と鼓状の胴部をもつ鬚、筒状の胴部をもつ鼎、鼓状の胴体の壺、觚、浅い盤状の高柄豆などである(図2-11~6)。

M32から出土した土器は筒状の高柄杯、袋状の脚をもつ鬚、広い口縁の袋足の觚、嘴形の足をもつ鼎、蓋付きの瓮、広い口縁の罐、把手付きで口の狭い杯、広い口縁と太い高台をもつ豆などである(図2-19~27)。

土器の形態と組合せが大きく異なることから、両者の年代差はかなり大きいように思われる。

M32と共にM40を切っている遺構はH7である。M32の広い口縁の瓮、浅い胴部の碗、広い口縁の罐等の土器をH7の同類の土器に比べると、H7:17の瓮は鼓状の胴部、広い口縁、大きな平底で、M32のものは球状の胴部、口縁は狭く、蓋をもつ。すなわち、前者が後者より古い特徴をもっている。ほかの遺跡から出土した土器と比べると、H7のものとよく似ている遺構がH14、H9である。H14:11の三足盤の胴部がH7:9の碗の形態と一致し、H9:1の觚がH14の同類土器(図2-14)と基本的に類似し、広い口縁をもち、胴部は鼓状を呈している。よって、両者はほぼ同じ時期のものと考えられる。

M40を代表とする土器群はH7、H14、H9を代表とする土器群と連続的な発展と継続の関係をもちないが、土器の形式的特徴から、M72の土器の組合せがこの空白を埋めると考えられる。M72:2の高柄杯は胴の部分で、柄と腹が、分離しないという器形上の特色がある。M72から出土した土器には高柄杯、鬚、鼎、瓮、罐、三足盤がある(図2-7~12)。鬚の形態から見れば、M72:4の鬚は短い流、細長い頸部、長い胴部で、M40と同じ段階のM19:7の鬚と異なる(図2-12'c)。M40:2の鼎は筒状の胴部、短い口縁をもち、M725:1の鼎が鼓状の胴部で、長い口縁をもち、鼎の器形にも差異があることがわかる。M40:7の高柄杯は広い口縁、柄と腹が分離し、胴部が細くくびれる。また、全体の土器の組合せも異なる。よって、M72を代表とする土器をH7とM40の間に置いてよいと考える。

一方、M54の土器群(図2-30~34)は胴部に横向きの把手がつくものが多くあり、ある段階の特徴を表していると考えられる。

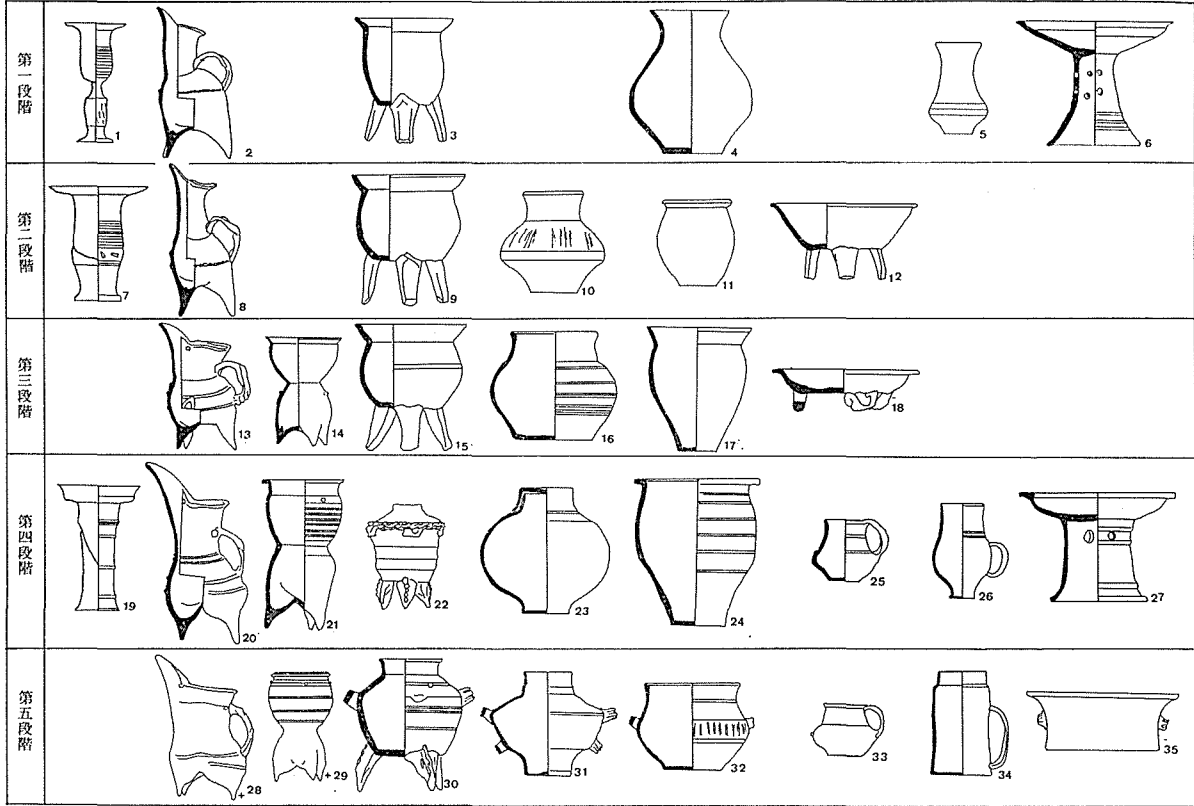


図2 呈子, 三里河遺跡(魯東南地区)の山東竜山土器の細分(+は三里河)

縮尺不同

れる。同様な内容をもつものは三里河遺跡のM2100があげられる。土器の具体的な特徴からみれば、M32の土器群と非常に異なる。M54:1の鼎は小口罐形で、三角嘴形の足をもち、M54:2の瓮(図2-31)は平底、胴部に四つの横向きの把手がつき、M54:6の杯は深腹、直口で、大きな平底をもち、腹は有段の口縁、丸味を帯びた大きな袋足をもつ。三里河遺跡のM106・M2100出土の甗(図2-29)も同一の段階のものである。以上の特徴はとりわけ新しいものだと思われる。そして、M32の土器群とかなり異なるので、M54の相対年代はもっとも新しいと考えられるのである。

これで、呈子遺跡は、少なくとも新旧の五つの段階に区分することができよう(図2)。

呈子遺跡の時期区分の結果から、魯東南地区のほかの山東竜山文化の各遺跡から出土した土器群をみると、両城鎮遺跡の土器が呈子の第二段階に、三里河遺跡のM106、M2100が呈子の第五段階に、M2124が第三段階に相当する。有名な東海裕遺跡の中国文化層の墓は呈子の第一段階に相当し、上文化層の墓は第二、三段階の間に位置し、上文化層の包含層出土の土器は呈子遺跡の第四段階に相当すると判断することができる。そして、大範荘遺跡から出土した土器のほとんどは呈子の第一段階と相似する。したがって、呈子遺跡の山東竜山文化の五段階の土器は、魯東南一帯に分布する山東竜山文化の全般的な特徴を表しているとみてよい。

2 魯東北地区

この地区では、発掘された山東竜山文化の遺跡は獅子行、魯家口、姚官荘を代表とする。

獅子行遺跡では、多くの土器を含む九基の墓葬と七基の灰坑が発見された。報告者がI-IのH1-M107の切り合い関係と土器の器形の変化に基づいて四期に分けているが、同一時期とされるものの中には、また異なる時期の土器が含まれているので、細分の必要がある。

報告者が第一期としたM102、104、106の中から出土した土器群を抽出し比較すれば、M104と残りのM101、M106

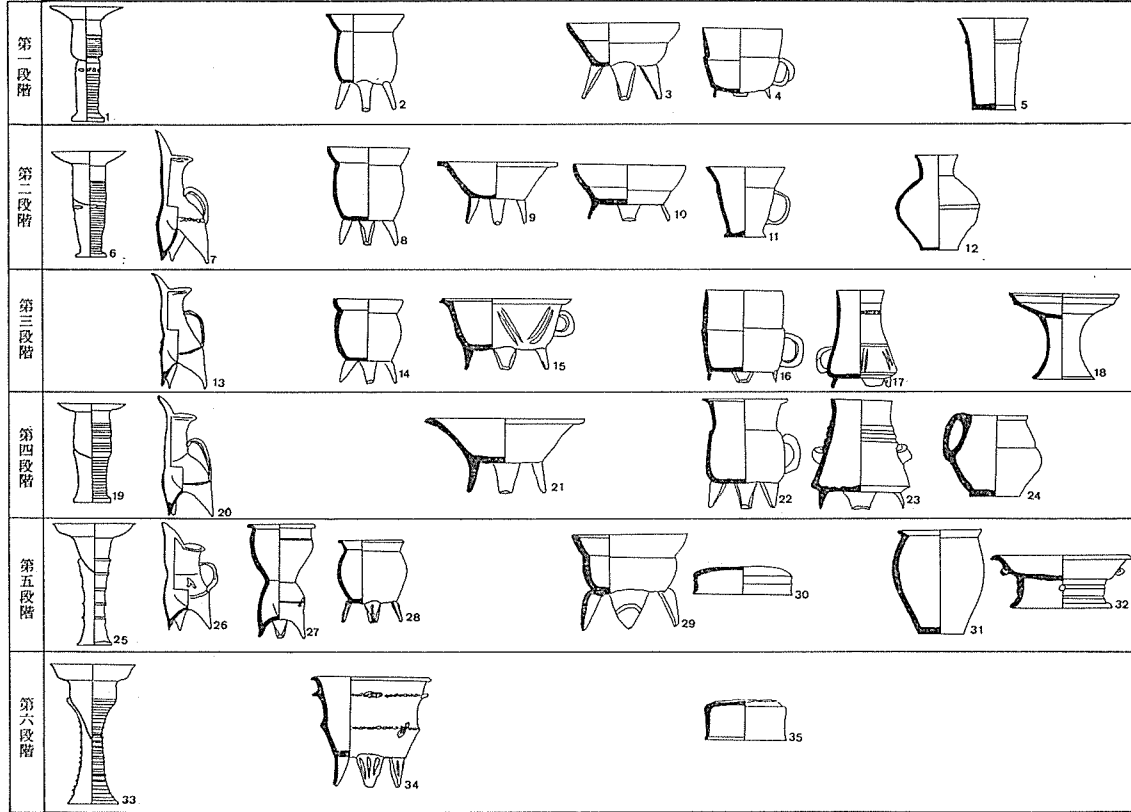


図3 獅子行遺跡（魯東北地区）遺跡の山東崑山土器の細分

縮尺不同

の高柄杯、鼎、三足盤、把手付き杯の形態が少し異なることがわかる(図3-1~4と6、8~11)。M106:6の鼎(図3-2)は長い口縁と胸部をもち、頸部と胸部の比が1:3で、M104:5の鼎(図3-8)はやや短い口縁で、そして、短い胸部をもち、頸部と胸部の比が1:4である。M102:2の高柄杯(図3-1)は杯部と柄の間が内にくぼみ、M103:9の高柄杯(図3-6)は杯部と柄の間がくぼみなり。M106:3の把手付き杯(図3-4)が直口丸底で、把手が胸部の中央と底部近くにとりつくのに対して、M104:6の把手付き杯(図3-11)は広い口縁で、平底、把手が胸部の中央にある。したがって、M102とM106を代表とする土器が獅子行遺跡の最も古いもので(図3-1~5)、M104の土器はそれより新しいものであると考えられる(図3-6~12)。

さらに、M104とM107(図3-13~18)の間にも差異がある。M104:1の鬚が細い胸部に、細長い頸部、長い足をもち、把手が頸部の付け根にあるのに対して、M107:8の鬚は太い袋足、凸状の胸部、把手は頸部の中間につけるといふ違いがある。M107:7の鼎の胸部はやや鼓状であり、M104:5の鼎と異なる。M107:1の三足盤も短い足で、把手がつくが、M104:2の三足盤は長い足をもち、把手がつかない。器種の組合せも異なり、M107は把手付き杯の種類が非常に多くなくつづる。M107を一つの発展段階とすることは無理ではない。

簡報の資料によれば、報告者がM107とM103を同じ第二期としてつづるが、この点にも問題が残っている。M103から出土した土器は高柄杯、鬚、鼎、三足盤、三足双耳杯と把手付き杯である(図3-19~24)。M103:4の鬚はM107:8の鬚よりやや肥大しており、頸部と腹部の境界線がはっきりしない。M103の把手付き杯(図3-23)は長頸、大きな平底に、短足で、M107:7の鼎とまったく異なるものである。高柄杯は太く短く、把手が内にくぼむ特徴があり、M107:4の高柄杯と比べると、かなり異なるものである。以上から、M103の相対年代はM107よりやや新しいと考えられる。

一方、T1のH1、H204、T1のH2から出土した高柄杯、鬚、鼎、三足盤、蓋、罐、豆などの土器は基本的に類似する外反口縁をもつために、同時期の土器群とすることに問題はな(図3-25~32)。これらの土器群はM103より

遅れるが、しかし、獅子行遺跡の最末期の土器であるとは言えない。より新しい土器は M105 と H202 から出土した三点の土器、すなわち、深い胴部、尖底、細く長い把手をもつ高柄杯、広い口縁、長い胴部、平底、浅い溝を刻む足をもつ鼎、そして、蓋である(図 3-33、35)。これらの特徴を上述の土器と比べると、差異は明らかである。M105 と H202 を獅子行遺跡の山東竜山文化の最も新しい時期のものとする。

獅子行遺跡同様の検討が必要な遺跡は姚官荘である。姚官荘遺跡の内容はかなり複雑で、大汶口文化、竜山文化、岳石(田中)文化の土器がある。そのうちでは、山東竜山文化の土器が一番多い。報告者は前期と晩期のみに分けているが、それではこの遺跡の山東竜山文化の様相を全面的に反映することができない。報告書に公表してある土器の出土位置に基づいて復元した土器の組合せから、結論だけを示すと次の五つの土器群に分けることができる。

第一群：H138、M10、H132、M178、M17 を代表とする。

第二群：H139、H144、H56、M11、M9 を代表とする。

第三群：H1、H135、H119 を代表とする。

第四群：H153、T5、T7 を代表とする。

第五群：H100、T1 の上層を代表とする。

第一群土器の組合せ及び特徴は獅子行の第四段階と基本的に同じであり、第二、第三群は獅子行の第五段階と類似し、さらに、第五群が獅子行の第六段階の特徴と一致する。

3 魯西北地区

魯西北地区に位置する尚荘遺跡は当地の代表的な大汶口、竜山文化の遺跡である。報告者は尚荘の土器を三期に分けて、第一期を大汶口文化として、第二、三期を山東竜山文化とした。^② 基本的な編年に問題はないが、山東竜山文化の土器の区

分については、再考の余地があると考ええる。

まず、山東竜山文化の鼎の重要な特徴である足の形態差が編年の意味をもつことは一般的に言えることであり、特に、長い嘴形の鼎の足は、各遺跡で非常に限定された時間内において見られる。したがって、これに着目すれば、編年の信頼性が高まることになる。そうすると、報告者の第二、三期の鼎は、同じ長い嘴形の足をもつことから、異なる時期の土器とするのは無理である。さらに、第一、三期の豆の形態は、やや異なるが、豆の出土地点の検討から、同じ層位(H108)から出るものであることがわかる。このように尚莊遺跡の山東竜山文化の土器の時期区分は再検討の余地があるのである。

簡報と報告書に発表された土器の出土した層位と灰坑との切り合い関係によれば、切り合い関係をもつ灰坑は少なくとも一三組あり、そのうち、出土量が多く、新旧関係がはっきりした灰坑 H157→H108 に示される時期差を尚莊遺跡の編年の軸としたい。この新旧の時期差を手がかりに、尚莊遺跡の山東竜山文化の編年を組み直すことができる。

H108から出土した土器は鬚、鼎、三足盤、鬲、罐、蓋、瓮、碗、盆、豆である(図4-11~10)。

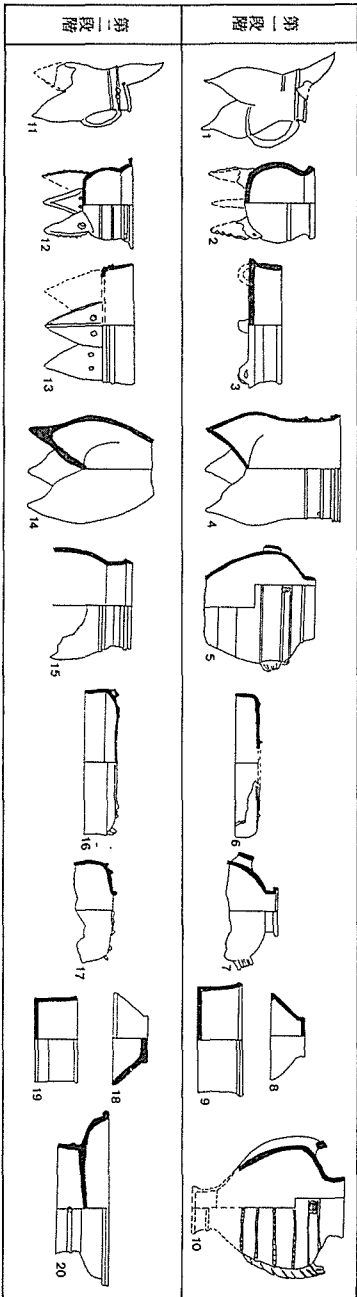


図4 尚莊遺跡(魯西北地区)の山東竜山土器の部分

縮尺不同

Ⅱ75から出土した土器は鼎、鬚、三足盤、鬲、罐、蓋、瓮、碗、盆、尊、蓋、盆である(図4-11~20)。

それぞれの土器群は山東竜山文化の一般的な組合せとしては十分であり、両者の器形を比較すると差異が非常に大きいといえる。したがって、尚莊遺跡の山東竜山文化は次のように二つの段階に分けることができる。

第一段階 H108、H146、H88、H90、H156から出土した土器群である。

第二段階 H75、H62、H147、G1、H92、H119から出土した土器群である。

魯西北地区における山東竜山文化のもう一つの遺跡は南陳莊遺跡である。この遺跡では、山東竜山文化の土器は二群に分けられ、第一群がⅡ8の袋状実足の甗、嘴状の鼎足を特徴とするもので、第二群がⅡ2の双耳瓮、縦長の注口の鬚、三角形の板状の足をもつ鼎である。前者は尚莊遺跡のⅡ108の土器の組合せとまったく同じであり、後者は尚莊遺跡のⅡ75の土器の組合せにかなり似ている。

荊寨王遺跡では、山東竜山文化の土器は数量が少なく、組合せも単純である。主な器種は嘴状の足をもつ鼎、平底の豆、直腹の盆からなり、これも尚莊遺跡のⅡ108の器種と同じであり、同時期と見なせる。

尚莊遺跡の西南に位置する有名な青堦堆遺跡から出土した土器群も二群に分けられる。第一群は三角形板状の足の鼎、横耳、袋足の鬚で、第二群は広い口縁の平底の豆、長い嘴状の足の鼎である。両者はそれぞれ尚莊のⅡ75・Ⅱ108の土器の組合せとまったく同じである。このように、魯西北地区では尚莊遺跡の山東竜山文化にみられる発展段階が普遍的に存在することがわかる。

以上の検討の結果から、尚莊遺跡の山東竜山文化の土器を新たな二段階に分けるのは問題なく、少なくとも魯西北の山東竜山文化の様相を基本的に反映していると考ええる。ただし、山東竜山文化の全期間継続したという証拠は得られておらず、後述するように前半期の遺跡は未発見である。

4 魯中南地区

尹家城遺跡の報告書によれば、この遺跡の山東竜山文化の層位及び遺構の間に切り合い関係は二百組以上ある。報告者は山東竜山文化の土器を六段階に分けているが、実際は、土器の共存関係及び層位関係によって、この遺跡の土器は九群に分けることができよう(図5)。

第一群は大汶口文化の特色を残す高柄杯、深い胴部をもつ罐状の鼎、深い胴部の平底の罐、深い胴部の豆、鼓状の胴部の杯等からなり、M117、M111、M112、M130、M106、M108から出土している(図5-1-5)。

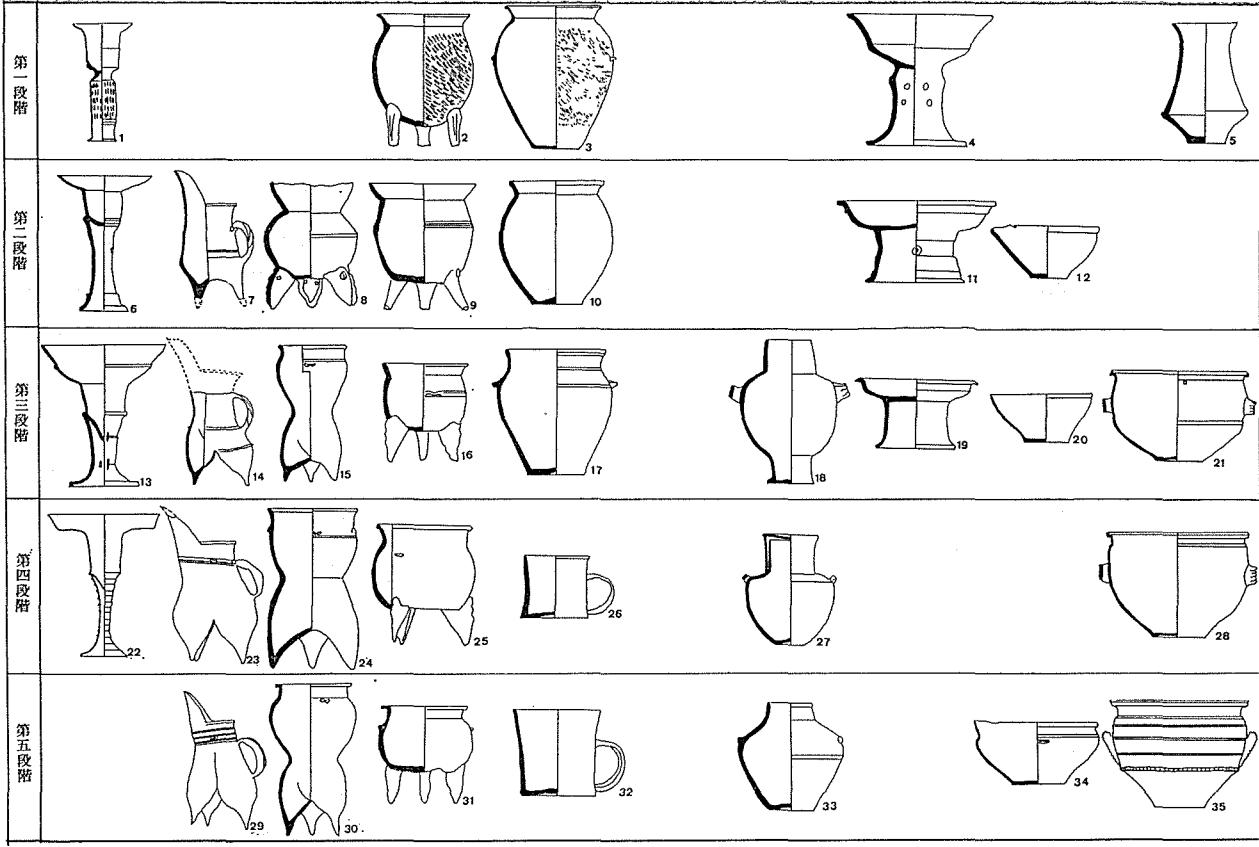
第二群は細く長い柄部と盤状の口縁をもつ高柄杯、実足と長い流をもつ筒状の胴部の鬲、弧形の足をもつ球状の胴部の甗、弧形の足をもつ盆形鼎、罐、大きな圈足を有する盤、注が上に伸びる甗からなり、F204、F205、F5、F11、F3から出土している(図5-6-12)。

第三群は深い胴部の高柄杯、筒状の胴部と袋状の足をもつ長い注の鬲、袋状の足の甗、三角形の脚をもつ鼎、双耳瓮、双耳罐、流が上に伸びる甗、把手をつける深い胴部の盆等から構成され、H786、M134、M3、H67、M7などから出土している(図5-13-21)。

第四群は深い胴部の高柄杯、長い注を有する実足の鬲、長い注をつける鬲形の器、肥大した袋足をもつ甗、蓋のつく瓮、短い胴部の筒形の把手付き杯、広い口縁をもつ豆、二つの把手をつける深い胴部の盆等から構成され、M126、M2、M130、M4、H276、H73、M38、M137、M125、M123、M105、M111、M135、M133から出土している(図5-21-28)。

第五群は大きな袋状の足をもつ直立注の鬲、細い腰と袋状の足に実足をもつ甗、球形の胴部をもつ鼎、狭い直口の深い胴部をもつ瓮、深い身の把手付き杯、突出する注をもつ甗、大きな把手を有する平底の盆からなり、M15、M139、H788、M127、H544、H540から出土している(図5-29-35)。

第六群は段状の口縁を有する袋状の足の甗、嘴形の足をもつ鼎、嘴形の足をもつ三足盤、深い胴部をもつ小さな平底の



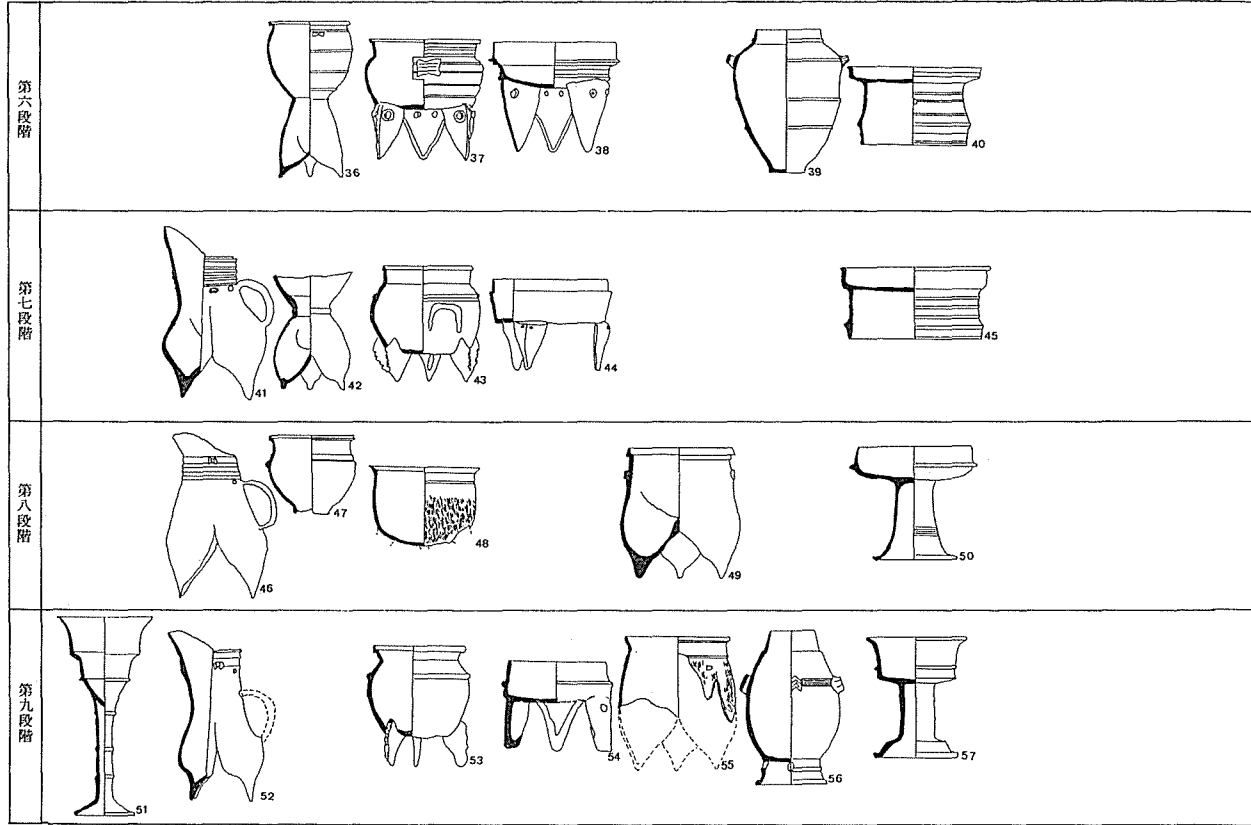


図5 尹家城遺跡(魯中南地区)の山東龍山土器の細分

縮尺不同

瓮、太い脚部をもつ豆等から構成され、H28¹、H555¹、H523¹、H207¹、H23¹、H776¹、H247¹、H31¹、H48¹、H65¹から出土している(図5-36~40)。

第七群は大きな袋状の足と短い注をもつ鬚、肥大した乳房状の袋足を有する腰のくびれた甗、断面形「V」字形の足をもつ平底の鼎、細く長い嘴形の足をもつ三足盤、深い胴部に太い脚部をもつ豆等から構成され、各々H50¹、H248¹、H594¹、H259¹、H537¹、H607¹、H116¹、M605¹、H70¹、H799¹から出土している(図5-41~45)。

第八群は注が非常に短い鬚、口縁の断面が方形を呈する深い胴部の甗、盆に似た鼎、口縁の断面が三角形を呈する高、長い脚部をもつ豆等からなり、H777¹、M203¹、H706¹、M5¹、H728¹から出土している(図5-46~50)。

第九群は長く細い胴部を呈する高柄杯、肥大した乳房状の脚に実足をつけた長い注の鬚、三角形の板状の脚をもつ鼎、三足盤、外反する口縁をもつ甗、球状の胴部を有する圈足の壺等からなり、H781¹、H420¹、H790¹、M124¹、H202¹、533¹、H607¹、H52¹、T1⑩¹、H472¹から出土している(図5-51~57)。

この九群の土器群の間の先後関係は、各群の土器を出土した遺構の間に存在する切り合い関係及びこれまでに見てきた土器の形態的特徴から保証され、この順に、尹家城遺跡を九段階に分けることができる。

尹家城に隣接する西呉寺遺跡の山東竜山文化の土器も五段階に分けられ、おおよそ尹家城の第二~四段階に対応させることができる。また、野店遺跡^④の土器は尹家城の第二段階に対応し、H8¹とH1¹の土器が尹家城の第四段階に一致するほか、前掌大、東砂荘、高皇廟、大汶口、花家寺、龍王店等の山東竜山文化の遺跡でも尹家城の各段階の土器と一定程度類似する土器群を認めることができる。このことから、この地域の山東竜山文化は尹家城遺跡の編年に代表され、ほぼ全体的な様相が示されているといえる。

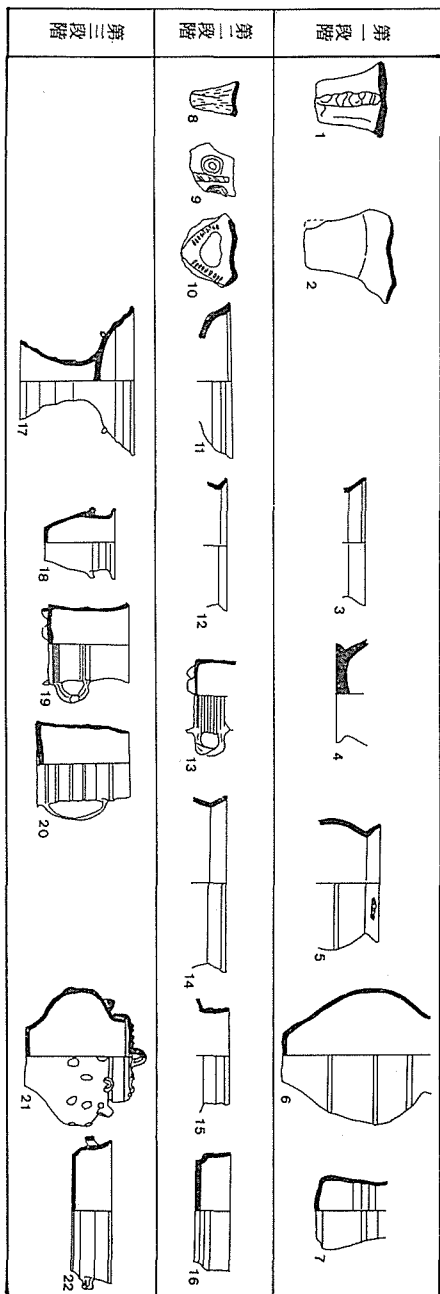


図6 大口遺跡(山東半島地区)の山東竜山土器の部分

縮尺不同

この地区では注目される遺跡が二つある。すなわち、大口遺跡と楊家園遺跡である。大口遺跡は廟島群島の砦磯島に位置する遺跡の一つである。この遺跡から出土した完形の土器は少数であるが、山東竜山文化のものが殆どであると報告されており、墓、灰坑の土器は二時期に分けられている。しかし、報告されている層位関係を検討してみると、報告者の編年観とやや異なる見解に達する。

まず、M14、M21、M22、M16、M15で出土した各土器群を同時期とするのは無理ではなからう(図6-17、23)。M14を代表とする墓は、この報告の第4層を切っているので、大口遺跡の墓の土器は他の層位と比べると、新しい発展段階のものと考えられる。

他の層位から出土した土器は非常に複雑であるが、器形の特徴がはっきりしている土器を含むT1①とT2(7A)の資

料を基礎に、二つの発展段階に分けることができる。

Ⅱ-1…④層土器の組合せ(図6-8~16)は鑿状と喙状と環状の鼎足、広い口縁の豆、甕、把手が底部に接続する把手付き杯、甗、直行する長い頸部を有する瓮等からなる。これはⅡ-1を代表とする土器の様相とは明らかに異なる。両者は異なる年代のものであると考える。

Ⅱ-1④層より下位にあるⅡ-2(Ⅱ-A)層の土器の組合せ(図6-1~7)は板状の足の鼎、足をもつ盤状の鼎、器蓋、甕等からなる。Ⅱ-2とⅡ-1④層の土器の組合せを比べれば、大きな差異が存在している。

したがって、大口遺跡の山東竜山文化の土器はⅡ-2(Ⅱ-A)層を代表とする第一段階、Ⅱ-1④層を代表とする第二段階、Ⅱ-1を代表とする第三段階という三段階に分けられる。

遼東半島の最南部の四平山遺跡から発見された山東竜山文化の土器も二群に分けられる。第一群は袋足長頸の甕、高い脚部をもつ豆、細頸壺、高柄杯、盆形の鼎、高柄杯と酷似した紅陶杯などからなり、年代がより古いと思われる。第二群は大口遺跡のⅡ-1を代表とする第三段階のものと同鉄山石塚の土器群に近似するとみなしえる。

山東半島北部側の楊家圈遺跡では、第一段階は③、④

対応関係

魯 東 南				山東半島と遼東半島南部		
呈 子	兩 城 鎮	東 海 裕	三 里 河	楊 家 圈	大 口	四 平 山
一		一 (東海裕類型)				
二	○	(呈子二段階類型)				○ (四平山前期類型)
三		二 一 (呈子三段階類型)		一	一	(楊家圈一段階類型)
四		三 (兩城鎮類型)			二	(大口類型)
五	○	二 (呈子五段階類型)		二	三	○ (楊家圈二段階類型)

一~九：各遺跡の段階，○：同類の土器がある。

表1 山東竜山文化の主な遺跡の

地区と遺跡 期	魯 西 北		魯 中 南		魯 東 北			
	尚 莊	南陳莊	尹家城	西呉寺	獅子行	姚官莊	魯家口	鄒家莊
第一期			一（尹家城一段階類型）		一		一（獅子行一段階類型）	
第二期					二 三 四	一		
第三期			二 三 四 (西呉寺類型)	一 二 三	五	二 三	二	一 二 (姚官莊三段階類型)
第四期	一 一 (城子崖類型)		五 六	四 五		四	三 四	
第五期	二 二 (尚莊二段階類型)		七 八 九 (尹家城九段階類型)		六	五	五	(魯家口五段階類型)

層の土器を代表として、大口遺跡の第一段階に似て、第二段階は②層を代表として、第三段階の基本的な特徴は大口遺跡の第三段階にあたる。^⑦

これまで見てきた各地域の遺跡において、器形がよく似ている土器を同時期の産物とみなし、層位関係を加味して、代表的な遺跡の各段階の対応関係を表1に示す。

この分析から各遺跡における山東竜山文化の継続時間が一律ではないことが明らかとなった。ある遺跡では、竜山文化の発展が連続的であるが、ある遺跡では、山東竜山文化の発展が断続的であり、代表的な各遺跡の全体からみれば、山東竜山文化の発展の歩みは非常に複雑な様相を呈し、けっして単純ではないといえる。表1からみれば、魯西北と山東半島の遺跡から出土した山東竜山文化の土器の年代は新しく、魯東北の遺跡から出土した土器の年代は古いことがわかる。魯中南と魯東南の遺跡から出土した土器は山東竜山文化の大部分の発展段階間の変化を示しているが、古い段階の土器は少ない。総じて山東竜山文化の出現から消滅にかけての全期にわたり継続した遺跡は非常に少ないことから、これまで行われて

いたある特定の遺跡の編年によって分期していた山東龍山文化の編年の欠点がわからう。

- ① 昌濰地区文物管理組「山東諸城呈子遺址發掘報告」『考古學報』一九八〇年第三期
- ② 山東省博物館「一九七五年東海徐遺址的發掘」『考古』一九七六年第六期
- ③ 中国社会科学院考古学研究所「胶県三里河」中国田野考古学報告專刊丁種第三十二号、一九八八年
- ④ 濰坊市芸術館等「山東濰縣獅子行遺址發掘簡報」『考古』一九八四年第八期
- ⑤ 中国社会科学院考古研究所山東隊「濰縣魯家口新石器時代遺址」『考古學報』一九八五年第三期
- ⑥ 山東省文物考古研究所等「山東姚官莊遺址發掘報告」『文物資料叢刊』5、一九八一年
- ⑦ 山東大學歷史系考古專業「山東省任平縣南陳莊遺址發掘簡報」『考古』一九八五年第四期
- ⑧ 德州地区文物工作隊「山東禹城縣荆寨王遺址的調查試掘」『考古』一九八三年第十一期
- ⑨ 中国社会科学院考古研究所「梁山青坨堆遺址發掘簡報」『考古』一九六二年第一期
- ⑩ 山東大學歷史系考古專業教研室「泗水尹家城」一九九〇年
- ⑪ 文化部文物局田野考古培訓班「兗州西吳寺」一九九一年
- ⑫ 山東省文物考古研究所等「山東栖霞楊家園遺址發掘簡報」『史前研究』一九八四年第三期
- ⑬ 中国社会科学院考古研究所山東工作隊「山東省長島縣砣矶島大口遺址」『考古』一九八五年第十二期
- ⑭ 澄田正一「遼島半島の先史遺跡」『樺原考古学研究所論集』四、一九七九年
- ⑮ 旅大市文物管理組「旅順老鉄山積石墓」『考古』一九七八年第二期
- ⑯ 劉敦愿「日照兩城鎮遺址調查」『考古學報』一九五八年第一期
- ⑰ 中国社会科学院考古研究所「胶県三里河」中国田野考古学報告專刊丁種第三十二号、一九八八年
- ⑱ 前掲註⑰に同じ
- ⑲ 臨沂文物組「山東臨沂大範莊新石器時代墓葬發掘」『考古』一九七五年第一期
- ⑳ 山東省博物館「山東任平尚莊遺址第一次發掘簡報」『文物』一九七八年第四期
- ㉑ 山東省博物館「山東任平尚莊新石器時代遺址」『考古學報』一九八五年第四期
- ㉒ 德州地区文物工作隊「山東禹城縣荆寨王遺址的調查試掘」『考古』一九八三年第十一期
- ㉓ 前掲註⑨に同じ
- ㉔ 前掲註⑩に同じ
- ㉕ 前掲註⑪に同じ
- ㉖ 山東省博物館「鄒縣野店」一九八六年
- ㉗ 山東省文物考古研究所等「山東栖霞楊家園遺址發掘簡報」『史前研究』一九八四年第三期

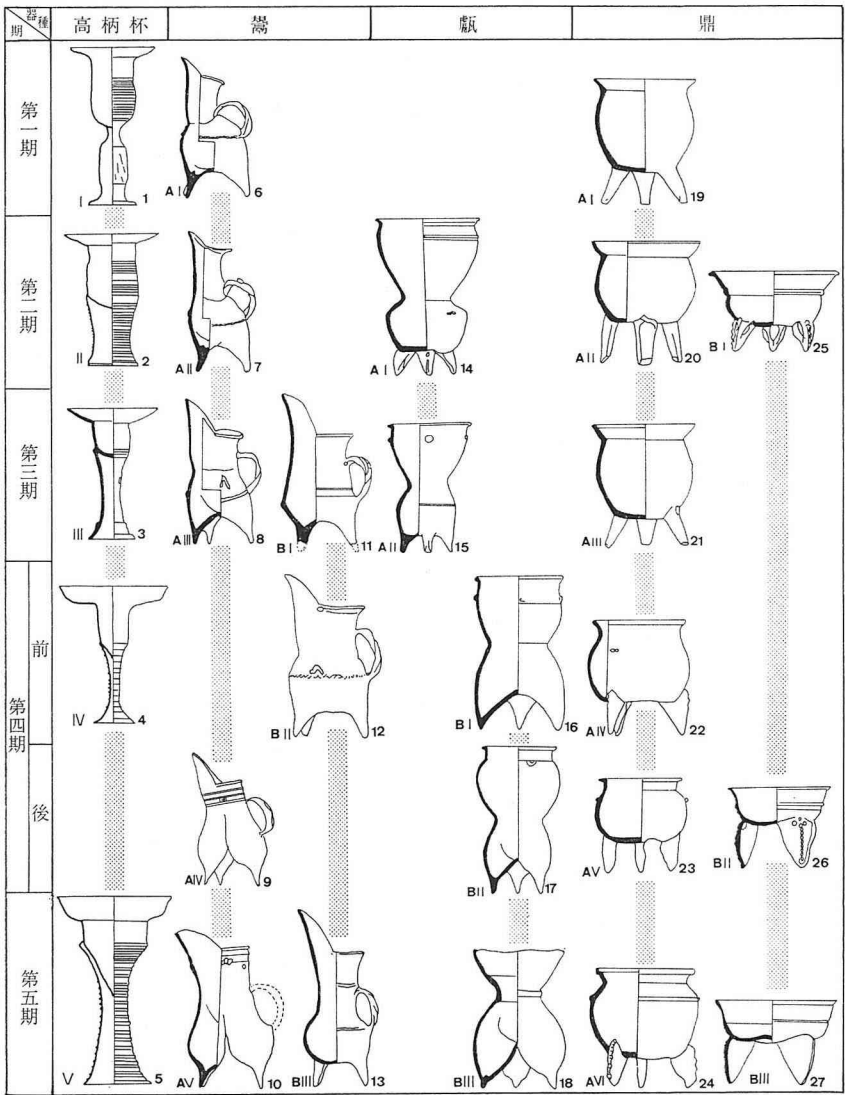


図7 山東竜山文化の代表的な土器の変遷

縮尺不同

B型に分かれる。A型が袋形の足、B型が実足をもつものである。

A型を五式に分ける。

I式 頸部は細く短く、胴部が球形である(図7-6)。

II式 頸部は細長く直立し、胴部が楕円球形で、把手は頸胴部の境から胴部の中ほどにかけてつく(図7-7)。

III式 頸部は太く、注は長くなる。袋足は深くなり、把手が頸部のなかばから胴部の上半にかけてつく(図7-8)。

IV式 注口は長くなり、頸部は短く、沈線を数条めぐらし、胴部との境も不明瞭になる。口縁部は直口になる。袋足は肥大する(図7-9)。

V式 広く短い注口をもち、頸部と胴部が一体になり、袋足は最も肥大する(図7-10)。

B型も三式に分ける。

I式 太い頸部をもち、胴部は楕円形を呈する。A型から派生してきた印象を与える(図7-11)。

II式 さらに頸部が太くなり、胴部は球形となる(図7-12)。

III式 頸部は細長くなり、注は長く直行する(図7-13)。

A型鬚は袋足が細いものから肥大したものへ、頸部が細いものから太いものへ、注が上部の開く長いものから上部が内側へ閉じる短いものへと変化する。把手をつける位置は低位から高位になる方向をもつ。B型鬚は頸部が細長くなる。

A I式は皇子一、獅子行一段階に属し、A II式は尹家城四段階に出る。A III式は尹家城七、八段階の土器である。A IV式は尹家城九、楊家園二、尚荘二段階に属する。B I式は尹家城二、魯家口二、姚官荘二段階の土器であり、B II式は姚官荘三、皇子三、四段階の層位から出土する。B III式は皇子六、魯家口六、姚官荘六段階の土器である。

瓶……出現の時期はやや遅いが、変化の特徴ははっきりしている。A型とB型に分ける。

A型は実足で、二式に分ける。

I式 三日月形の足を有する(図7-14)。

II式 柱状の足を有する(図7-15)。

変化の方向はI式からII式へ変化する。

B型は袋足で、三式に分ける。

I式 細い袋足で、実足の尖端部をもたない(図7-16)。

II式 肥大した袋足、尖端に長い実足をもつ(図7-17)。

III式 乳房状の肥大した袋足で、乳頭状の実足をもつ(図7-18)。

細い袋足から乳房状の袋足へと変化する。

A I式は尹家城二、姚官莊二段階にあり、A II式は姚官莊三、魯家口三、呈子三、獅子行三段階の層位から出土している。B I式は尹家城四、西呉寺三段階に属し、B II式は尹家城五、六、尚莊一段階の土器である。B III式は尹家城九、尚莊二、姚官莊五段階に相当する。

鼎……山東地域では非常に古い歴史をもち、北辛文化に出現し、大汶口文化の時期に十分発展して、山東竜山文化では最も代表的な土器となる。胴部と足部の形状を基準として、A型とB型に分ける。

A型は罐形の胴部のもので、鑿状或いは板状の足をもつ。五式に分ける。

I式 広口で、頸部は外反し、鑿状の足をもつ(図7-19)。

II式 頸部はやや内彎し、鑿状の脚部は長くなり、胴部は細くなる(図7-20)。

III式 頸部は短くなる(図7-21)。

IV式 頸部が細くなり、三角形の板状の足をもつ(図7-22)。

V式 平たい口縁で、直立する頸部と肩部の二つの紐をもち、胴部は膨らみ、分厚い三角形の足をもつ(図7-23)。

Ⅵ式 二重口縁、斜めの頸部をもち、胴部は浅くなり、薄い三角形の脚をもつ（図7—24）。

B型は盆形の胴部で、嘴足をもつ。三式に分ける。

Ⅰ式 広口で胴部が二段になり、弧形三角形の足をもつ（図7—25）。

Ⅱ式 底が浅く、長い嘴形の足をもつ（図7—26）。

Ⅲ式 底が浅く、上げ底になり、半月形の脚をもつ（図7—27）。

A型とB型の変化の方向は各々鑿状足から三角形状脚へ、弧形三角形足から嘴状の足、そして半月形の足へである。

AⅠ式は尹家城一、魯家口一段階の層位に出土し、AⅡ式は呈子一、獅子行一段階に属し、AⅢ式は尹家城四段階に見られる。AⅣ式は魯家口六、呈子六、尹家城九、姚官莊六段階に出土している。そして、BⅠ式は姚官莊二、尹家城二、西呉寺二段階の層位に出土し、BⅡ式は姚官莊四、魯家口五、尹家城六、大口二、尚莊一段階から出土している。そして、BⅢ式は魯家口六、尚莊三、楊家圈二段階に認められる。

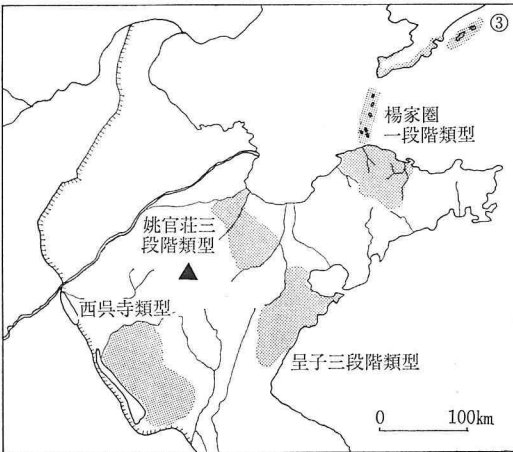
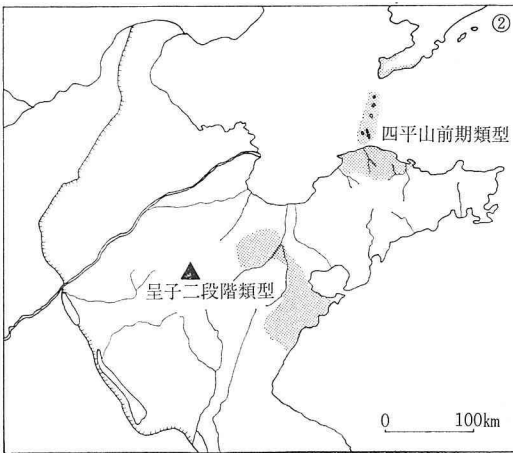
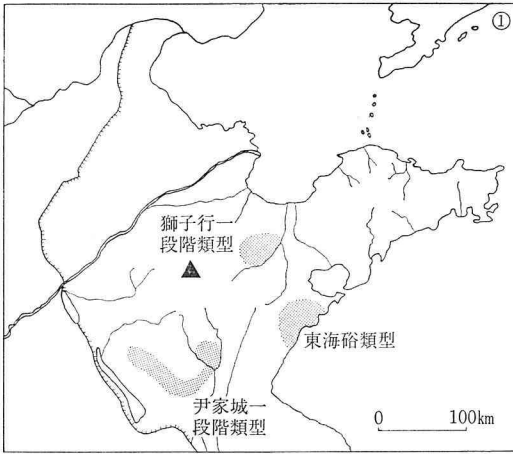
高柄杯の変化から見ると、五つの発展段階がある。A型鬚も五つの段階に分けたが、B型の鬚の変化から観察すれば、BⅡ鬚はAⅢとAⅣ鬚の間に存在する断絶を補うことができるために、鬚は計六つの発展段階に区分することができる。

A型鼎には六つの発展段階があるが、B型鼎は三段階に分けられる。以上の代表的な土器の発展段階を山東竜山文化の再編年の指標とすれば、山東竜山文化は大きく五期に分けられることができる（図7）。甗は出現する時期が高柄杯、鬚、鼎より遅れるが、第二期から第五期にかけて連続的に存続している。いっぽう第三期には、BⅠ鬚が出現して、第四期には、BⅠ甗、AⅡ鼎が出現し、A型Ⅱ甗はなくなり、また、B型Ⅱ鼎やⅣ式高柄杯の形も大きな変化を起こす。これからみると、第三期と第四期の間には、山東竜山文化の激しい変動が暗示されていると思われる。第四期に含まれる土器の型式はほかの時期よりやや多く、とりあえず第四期を前後二つの段階に分けて、将来、新しい資料が増えれば、さらに、もう一時期を設けることにしたい。

四 文化類型の区分と動態

さて、以上述べた山東竜山文化の編年案にしたがって、同時期に異なる地区で出土した土器の形態の差異と土器群の組合せの差、器種の増減の変化を基準として、文化の類型を時期ごとにとらえることが可能になった(図8)。

第一期では三つの地域に特徴的な山東竜山文化類型が認められる。魯中南と魯東北の土器群を比べると、前者には、条席文が見られる。また、前者では、鼎の足は直立する。高柄杯の器壁は厚く、胴下部が直角に張り、豆の脚部は高柄杯と同様に作られ、大汶口文化の要素を残している。後者の鼎の足は鑿



山東竜山文化の編年と類型（李）

状で外方に開く。条蓆文が少ない。豆は杯部が浅く、高柄杯は大きなラッパ状の口をもつ。そして、新しい器種として三足杯が出現している。両者の土器群には以上の差異があることが分かる。よって前者を「尹家城一段階類型」と呼び、後者を「獅子行一段階類型」と呼んで区別する。

この両類型の間に位置する魯東南の土器群の特徴は両類型とも異なる。まず、第一に鬚が上げられる。高柄杯はラッパ状の口縁で頸部がしまり、胴部が円形で、器壁が薄い。鼎の脚は「八」字形になり、大きく浅い杯部と太い脚部をもつ豆がある。これを「東海碯類型」と呼ぶことにする。

これまでの資料によれば、魯西北と山東半島に第一期の土器群がまだ発見されていないので、山東竜山文化は以上の三

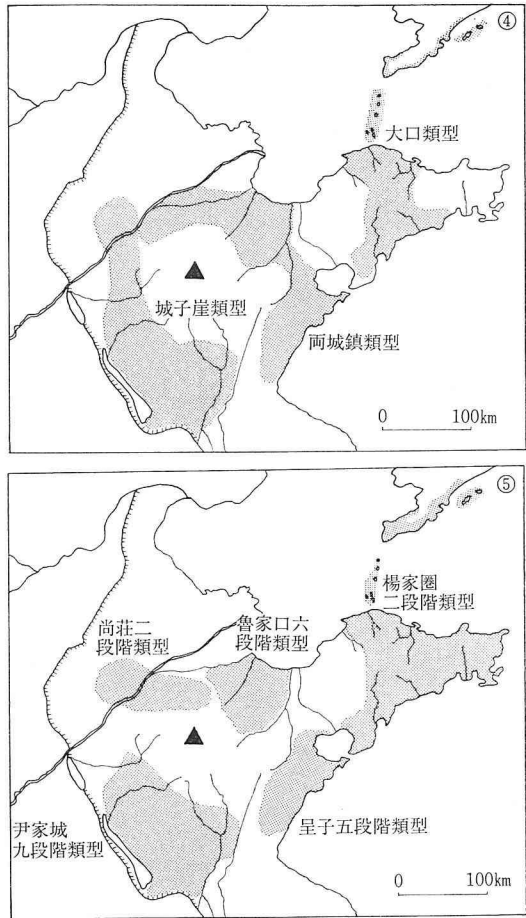


図8 山東竜山文化各類型の分布範囲の動態

- ① 第一期
- ② 第二期
- ③ 第三期
- ④ 第四期
- ⑤ 第五期

つの類型から始まると考えられよう。

第二期になると、山東崑山文化の分布範囲は泰山の東側で広くなり、文化の様相にかなり斉一性が認められるようになる。しかし、泰山の西側では分布は希薄となり、基本的に二つの類型にまとまる。

この時期の魯東南、魯東北では、土器群の間に多くの相異点はなく同一類型とみなしうる。鬚は大汶口文化の後に再び盛んになり、実足の袋足付け根の内部が突出する特徴が目立ち、頸部が伸びる。鼎は鬚形の足であり、高柄杯は非常に大きなラップ形の口縁部を有し、杯部が浅く、胴部と脚部の境界線がなくなる。このような共通の特徴が泰山の東部の広い範囲に行きわたる。これを「呈子二段階類型」と呼ぶ。

呈子二段階に併行するのは遼島半島の最南部で発見された四平山積石墓の土器群である。鬚はかなり肥大した低い袋足をもち、山東半島の大汶口文化の後期の特徴を残している。高柄杯は紅陶で、泰山地域の黒陶の高柄杯に酷似した当地のものである。しかし、土器群の全体から見れば、製作の技術レベルは低いと言える。これを「四平山前期類型」と呼んでもよい。

ところで、この類型の分布範囲はどこまでがふさわしいかについては、今少し検討の必要がある。遼島半島で発見された山東崑山文化の遺跡はあまり多くなく、多くは遼島半島の最南部の沿海一帯に分布しているのである。山東崑山文化は山東地区から成立した後、周辺地区に伝播してゆくわけであるから、四平山の積石墓が代表する土器群の文化様相が山東から伝わったことは間違いない。この伝播の過程で、文化の様相は徐々に変化してゆくのであり、また、山東半島は遼島半島と泰山地区の間に位置することを考慮すれば、四平山の積石墓の土器群は、泰山の周辺地区の山東崑山文化の影響によって作られたか、或いは泰山地区から直接に搬入されてきたものとするよりも、むしろ山東半島の影響を受けて作られたか或いは山東半島から直接搬入されたものとみるほうがふさわしいと思われる。

第三期に土器群の地域性は顕在化する。それまでの呈子二段階類型は分裂し、泰山の西部地区、それとともに山東半島

の土器群の数量も増えるので、計四つの類型に分けられる。

まず、魯中南と魯東北を比べてみる。魯中南の土器群は、鬚の頸部が短くなり、胴部が楕円形で、実足の付け根に浅い凹みがあり、甗は胴部が球形である。高柄杯の脚部は細長く、盤状の口縁で、胴部は深く、丸底になる。盆形鼎はなく、罐の口径はやや大きく、蓋が発達する。豆は太い脚部をもち、杯部は浅い。これに対して、魯東北の土器群は、鬚は頸部が長く、胴部が球形で、実足部に袋足の痕跡があり、甗は鼓状の胴部で、平底である。豆は脚部が細く、広い盤状の杯部を有する。蓋は少なく、把手のつく器種はかなり多い。鼎の足には押圧突帯文を施し、筒状の罐はないという特色が存在している。両者の差異ははっきりしており、この区別に基づいて、前者を「西呉寺類型」、後者を「姚官莊三段階類型」と呼ぶことにする。

以上の二つの類型の間に位置する魯東南一帯は中間的な特徴を呈する。たとえば、鬚の胴部が球形を呈しながら、実足の足部に袋足の痕跡がある。甗の胴部は球状と鼓状の器形を呈する。鼎は大きく、足全体が鑿状になり、甗は袋足で、罐の口径は大きく、平底である。これを「呈子三段階類型」と呼ぶことにする。

山東半島は、常に強い地域性をもち、この時期も例外ではない。例えば、鼎足は三角形であり、双腹鼎や把手をつける鼎も存在する。細い脚をもつ盤状の豆があり、広口で小さい平底の罐、大きい平底の盆が存在する。こういった特徴は地域性を示しながら、姚官莊三段階類型の影響を受けていると考えられる。これを「楊家園一段階類型」と呼ぶことにする。第四期には、魯西北地域にも広がり、同一の特徴が広い範囲に再び出現した。微妙な区別を除けば、大きく三つの類型に分けられる。

泰山の西側の魯中南と魯西北の土器群の特徴は基本的に類似している。たとえば、鼎足は長い嘴形になり、鼎の胴腹部は罐状で、鬚は大きな袋足、豆の脚部の太さは盤の口径に一致する。また、新たな器種として鬲や大口の平底の盆が出現する。泰山の西側によく似た相似の文化様相が現れる現象は、おそらく第三期の西呉寺類型が北進して、発展してきたこ

とを示すのであろう。これを「城子崖類型」と呼ぶことにする。

同じように、泰山の東側の魯東南と魯東北部でも土器群の様相が基本的に類似している。鼎の足は短い嘴の形になり、鼎の胴部は様々な器形を呈し、双腹形の鼎以外に、盆状の鼎もある。把手をつける狭口の平底の盆は多く、蓋はかなり発達する。豆の盤状部はやや浅く、脚部もやや細い。蓋をつける鼓状の瓮は非常に盛んになる。高柄杯は直口で、鬚の形態は細身になり、実足をつける。高柄杯と甗は魯東北部でいまのところ発見されていないが、各遺跡の現状から見れば、この地域でも存在するはずである。これらの様相は城子崖類型と同一であるとはいえないと考えられる。よって、これを「兩城鎮類型」と称し区別する。

ここで、城子崖類型と兩城鎮類型の境界線はどこにひくか、検討してみる。両者の間に接する地区では、文化の様相は複雑である。将来の資料が次第に増えることによって、一つの間類型を抽出できるかもしれないが、両者の区別を明確に表現するために、とりあえず、両者の接する北部では、清河下流域の遺跡^①の地理的位置を両者の境界線とし、南部では、魯中南と魯東南を連接する沂河の上流域の遺跡^②を境界線とすることにする(図1)。

山東半島では、発見された資料が断片的であるが、遺跡は多い。その中で、この時期は大口遺跡の土器群を代表とするのがふさわしい。鼎の足は長い嘴形或いは鑿状を呈し、豆の脚はかなり細く、狭口瓮と狭口鼓状腹部の甗もある。これを「大口類型」と称する。

第五期には、泰山周辺の二つの類型はそれぞれ分裂し、強い地方色を示すようになり、計五つの類型に分かれる。

まず、魯西北と魯東南の土器群の基本的な特徴を比べる。魯西北地区では、鬚の袋足はかなり肥大し、実足をもたない。甗は二重口縁であり、罐形の鼎は三角板状の脚をもつ。狭口鼓状の瓮は圈足と条状の把手をつける。様々なキノコ形の把手をつける蓋が多い。魯東南では、鼎は罐状の胴部であり、長い嘴足をつける。鬚は袋足と実足の二種類がある。筒形の長い把手をもつ杯も存在する。そして土器の胴部に横方向の把手をつける特徴が一般的である。以上より、両者は区別さ

れる。魯西北の土器群を「尚莊二段階類型」と呼び、魯東南の土器群を「呈子五段階類型」と呼ぶことにする。

上述の二つの類型の中間に位置する魯東北の土器群は中間色を呈しているといえる。鬚はかなり長い頸部と実足をつけ、袋足がない。鼎は鼎部が深く、足は広い半月形である。高柄杯は尖底であり、脚部は太い。これを「魯家口五段階類型」と呼ぶ。魯中南の土器群も地方色が強い。鬚は袋足に長い実足をつけ、鼎は罐状の胴部を呈するが、三角形の足が非常に低くなる。高柄杯の器壁はやや厚くなり、圈足の瓮と広く長い嘴形の三足盤と細い脚をもつ豆(図5-55、57)はほかの地区に認められない。これを「尹家城九段階類型」と呼ぶことにする。

山東半島では依然として、鼎の足は「V」字形、鬚の袋足は非常に長く、舌状の脚や大きな圈足の豆、双腹の盆がある。これを「楊家圈二段階類型」と呼ぶ。

以上、時期と地区差に基づいて、山東竜山文化を十七文化類型に分けた。時間の軸における山東竜山文化の各類型の空間分布は決して静止せず、流動的であるということがわかる。これは当時の人間集団の一定の活動が残した考古学的現象の一つである。山東竜山文化の各文化類型の分布範囲の変化の規模は必ずしも小さくなく、全段階を通してみられることは注目に値する。

① 山東省文物研究所等「山東広饒新石器時代遺址調査」『考古』一九八五年第九期

② 臨沂文物組「山東臨沂大範莊新石器時代墓葬發掘簡報」『考古』一九七五年第四期

五 文化類型変化の背景

どんな原因によって、先述したような山東竜山文化の類型の分布範囲が激しい変化を引き起こしたかを考えると、当時の自然災害(例えば、黄河の洪水)による原因を想定することができる。山東竜山文化の人間集団にとって、黄河氾濫の自然災害による脅威は人間集団間相互の脅威よりも非常に強かったと思われる。

本稿の最初に述べたように、泰山が黄河に直面しており、黄河の流れはここで泰山に阻止されるために、ある時期は北すなわち渤海に流入し、ある時期は南すなわち黄海に流れることは先史時代にしばしばあったはずである。毎回の黄河の改道或いは氾濫は山東竜山文化の各類型に激しくぶつかるわけで、水害が軽い場合には人間集団は移動を起こし（文化類型の移動）、重い場合にはその地区の山東竜山文化あるいは当時の人間の生きる環境が破壊されたに違いない。

魯西北の尚莊遺跡では大汶口文化晩期の遺構が発見されたことがあるにもかかわらず、山東竜山文化の第一期には、この地区では山東竜山文化の遺跡は発見されていない。これは黄河が北の渤海に流れることによって引き起こされたと考えられないだろうか。

魯中南では、尹家城一段階類型の成立を指標として、早くから山東竜山文化段階に入ったことがわかるが、山東竜山文化の第一期の類型の分布範囲が非常に狭く、もともとよく使用された鬻という土器を大量に作る能力がなくなった現象は、洪水災害の直後に人口が減少し、生産力が低くなった事実を反映している可能性がある。

山東竜山文化が本格的に成立し得た時期は第二期である。この時期の土器は泰山の東側に顕著に見られるが、泰山の西側の地域では、この第二期の土器がどうしても発見されない。これも主な原因は黄河の氾濫であろう。第三期に、黄河は再び渤海に流れたのかもしれない。その後、黄河は安定期に入ったように考えられる。それによって第四期には西呉寺類型が北へ波及してから、城子崖類型が成立する。第五期にはいると、黄河は長期にわたり安定したようである。山東竜山文化は非常に繁栄し、最高峰に到達した。この時期に出現した山東竜山文化の類型は黄河の氾濫と直接の関係がないかもしれない。経済の発達によって不均質な地方類型が形成されたものではないかと考えられる。総体的にみて、山東竜山文化の第五期以前に発生した各類型の変移の成因は、黄河の氾濫或いは改道及び泰山水系の氾濫との関係が深いと考えられるのである。

多くの学者達は山東竜山文化を論じる時に、この文化の終末についてよく議論してきた^①。実際、山東竜山文化の第五期

以後には黄河の大洪水の災害によって徹底的に壊されて、再び回復できなかったと考える。中国の古代の文献によれば、鯀と禹は黄河の大洪水を治めたという伝承がある。② かりに鯀と禹が生きた時代が間違いないなら、ちょうど山東竜山文化の第五期以後に発生した大事件となるわけである。山東竜山文化の終末期の¹⁴C年代を紀元前二〇〇〇年とするならば、その頃、海面上昇の中期にはいることから、大洪水が発生した可能性が高くなる。④ 鯀と禹に治められた大洪水の場所を黄河の中流域に位置する中原一帯に認める歴史の事実から考えると、黄河の下流域に位置する山東の地域に発生した大洪水の持続時間の長さ⑤と流量は非常に大規模になるはずである。したがって、山東竜山文化の終末は夏文化の初期に起こった大洪水によって徹底的に破壊されたと考えられるのである。

- ① 吳汝祚「兩城類型分期問題初探」『考古學報』一九八四年第一期
 韓鎔「試論城子崖類型」『考古學報』一九八九年第二期
 ② 鄭衡「試論夏文化」『夏商周考古學論文集』一九八〇年
 ③ 前掲註②に同じ
 ④ 宮本一夫「海峽を挟む二つの地域——山東半島と遼島半島、朝鮮半島南部と西九州、その地域性と伝播問題」『考古學研究』第37卷第2号
 ⑤ 鄭衡「夏文化分布区域内有関夏人伝説的地望考」『夏商周考古學論文集』一九八〇年

六 結 語

多数の研究者は岳石文化を山東竜山文化の後続者として議論している。① これらの論説の根拠は二者の分布範囲と土器の色調が一致するという二点しかない。しかしながら、山東竜山文化の中でよく認められる高柄杯、鬚、甗、鼎などの代表的な土器は岳石文化の中に認められない。尹家城遺跡の岳石文化には鼎が認められるが、器形が非常に小さく、器壁が厚いので、実用器ではないから、山東竜山文化とまったく関係ないであろう。そして、岳石文化の鼎は泰山の東側へ行くと、次第に減り、さらに、山東半島では鼎はまったく認められなくなる。④ 繩蓆文を代表とする中原の文化要素もそうである。⑤ 岳石文化は泰山の西部から山東半島へ行けば行くほど文化の様相が単純化される特徴をもつといえる。岳石文化の照格荘遺跡では、罐類だけを主とする様相が出現していることも、このことと一致する現象であろう。したがって、岳石文化を

中原文化の東進したものであるとする理解より、むしろ、岳石文化が東から西へ漸進したことの反映ではないかと認識する。^⑦

いわゆる山東竜山文化が黄河の大洪水の氾濫によって徹底的に壊されたというのは、一方で、この文化の要素が他の地区に分散したように見うけられることも関連があるように思われる。実は、夏文化と認められる二里头文化の中で存在している鼎、鬲、甗、弧形杯、瓦足鼎等の器種^⑧は山東竜山文化と切っても切れない深い関係を持っている。これは黄河の大洪水の後に多くの山東竜山文化の人間集団が山東から中原へ移動した結果ではなからうか。このような現象は山東竜山文化に出現するものだけでなく、大汶口文化段階にもよくでてくる。特に注目されるのは、河南地区で発見した大汶口文化の単純な墓^⑨、長江流域で出現した薛家岡文化、遼河流域における小河口文化の中で発見された大汶口文化の彩陶の图案^⑩、さらに山東の先史文化に起源する鼎、鬲という土器は連続的にほかの地区へ伝播しており、それはまた山東竜山文化の終わりと共に終焉したものである。^⑪ こうした考古学現象を引き起こす原因については、必ずしも大汶口—山東竜山文化の影響力の強さと深さによって決められたものではなく、やはり山東の先史時代の人間集団が黄河の大洪水の被害によって様々な地区へ移動して、当時の先史文化と自然に定着した結果と理解できるのである。

- ① 敵文明「東夷文化的初探」『文物』一九八九年第九期
- ② 山东大学歴史系考古專業教研室『泗水尹家城』一九九〇年
- ③ 鄭衡「夏文化分布区域内有関夏人伝説的地望考」『夏商周考古学論集』一九八〇年
- ④ 中国社会科学院考古研究所山東工作队「山東牟平照格莊遺址」『考古学報』一九八六年第四期
- ⑤ 註④に同じ
- ⑥ 韓熔「試論城子崖類型」『考古学報』一九八九年第二期
- ⑦ 李權生「岳石文化の起源について」『古代文化』一九九二年第六期
- ⑧ 黎家芳「山東史前文化在中華遠古文明形成中的地位」『山東史前文化論文集』一九八六年
- ⑨ 武津彦「略論河南省境内発見の大汶口文化」『考古』一九八一年第三期
- ⑩ 安徽省文物工作队「潜山薛家岡新石器時代遺址」『考古学報』一九八二年第三期
- ⑪ 遼寧省博物館「遼寧省傲漢旗小河口三種原始文化的發現」『文物』一九八七年第十二期
- ⑫ 高広仁ほか「史前陶器初論」『考古学報』一九八一年第四期

挿図出典

- 図1 『中華人民共和国地図集・山東省』(一九七四年)を下図に筆者作
- 図2 昌濰地区文物管理組「山東諸城呈子遺址発掘報告」『考古学報』一九八〇年第三期
- 図3 濰坊市芸術館等「山東濰県獅子行遺址発掘簡報」『考古』一九八四年第八期
- 図4 山東省博物館「山東任平尚莊遺址第一次発掘簡報」『文物』一九七八年第四期
- 山東省博物館「山東任平尚莊新石器時代遺址」『考古学報』一九八五年第四期
- 図5 山東大学歴史系考古專業教研室『泗水尹家城』一九九〇年
- 図6 中国社会科学院考古研究所山東工作队「山東省長島県龍門島大口遺址」『考古』一九八五年第十二期
- 図7 図2と8と同じ
- 図8と12 『中華人民共和国地図集・山東省』(一九七四年)を下図に筆者作

〔謝辞〕 小稿作成中で、恩師小野山節先生から御指導を頂きまして、高橋克壽氏に教えられた点が非常に多く、また、菱田哲郎、岡村秀典、宮本一夫、大貫静夫の各氏や矢野健一、次山淳同窓から貴重な意見を頂きました。また、藤沢彰子氏にはたいへん世話になりました。末筆ながら心より感謝の意を申し上げます。

(京都大学文学部考古学研究室大学院生、

scientific committee and its advisers were indeed heavily influenced by politics.

Chronology and Distribution of Shandong
Longshan Culture

—with an emphasis on pottery—

by

LI Quansheng

So far, the temporal and spatial changes in Longshan culture in the province of Shandong in China have yet to be properly clarified. In particular, there is a marked tendency to take the chronology of a single site and treat it as the chronology of Longshan culture as a whole. In order to elucidate the chronology and the distribution of Longshan culture, the Shandong Longshan cultural area is divided into five areas in this paper. Through a stratigraphic and typological analysis of assemblages of pottery excavated from representative sites in the five areas, the various stages of Shandong Longshan culture are examined.

The chronology of Shandong Longshan culture can be divided into five periods using *gaobingbei*, *gui*, *yan*, *ding* and other standard pottery types as a basis. Subsequently, by means of this new chronology, seventeen different distributions of Shandong Longshan culture can be classified by grasping the characteristics of the pottery of each period. The characteristics of unbalanced development and fluidity of space which characterized Shandong Longshan culture are thereby clearly indicated. It is possible that the temporal and spatial changes in Shandong Longshan culture were caused by flood of the Yellow River.